

クラス会および近況だより

老いて思い出すまま

谷口 順一 (昭10)

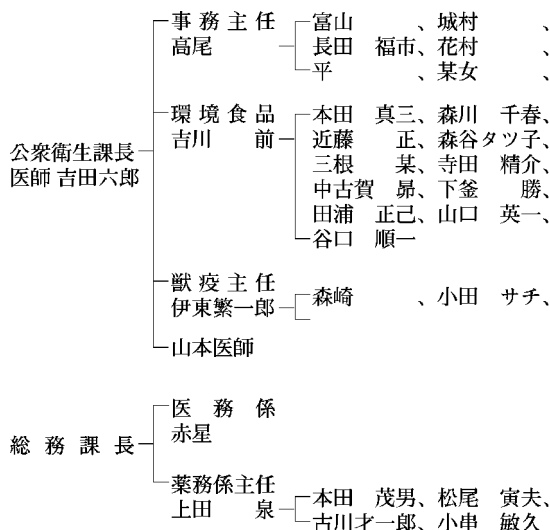
長崎県庁勤務

昭和22年5月3日夜、桜馬場に住居しておられた長葉での恩師小沢敏夫先生をお訪ねして、持参した履歴書をお預けして適当な勤め口がありましたらとお願いして帰宅す。

同5月28日夜又お訪ねして就職口をお願いしたところ「炭坑でもと言うのならば長崎県庁に教え子で衛生部に松永一君が居るから相談してやろう」と親身になってもらい、翌日だったか「松永君に話したら履歴書を出してみないかとのことだったから、君が直接松永君に届けないか」との事でした。翌々同月31日、当時出島の現税関の建物内に県衛生部は借り住いをしており(昭和21年11月18日衛生課が衛生部に昇格し、部長は草野医師)総務課、予防課、公衆衛生課の三課から成り、総務課勤務医師松永一氏を訪ねて宜しく頼み、履歴書を同氏を紹介者とし当局に提出してもらった。

同年7月6日、県衛生部から連絡あり、明日県衛生部の吉川前公衆衛生課衛生係主任の許まで出頭するようにとの事。(私の免許証は引揚まで所持していたが乗船に際して身分の知れるのを恐れて焼き棄てたので、)あわてて自宅の前隣に居住の中島茂男氏(長崎医大薬専同窓3年先輩で県立瓊浦中学化学教諭)の薬剤師免許証を見せてもらい、これを見本に写しを作製して同7月7日早朝県衛生部に出頭した。吉川主任(長葉を大正9年卒の大先輩であった)の面接種々質問の後、吉田六郎公衆衛生課長に引合された後、同部総務課長席に案内引合わされた。その結果直に採用の手続を取ることになった。

同7月27日、日曜日であったが県衛生部から通知で「採用と決定したから出頭すべし」との事。翌28日県衛生部に出頭、直に「公衆衛生監視員を



命ずる、月手当壱千七拾円給与、長崎中央保健所勤務。昭和22年7月26日「長崎県衛生部」の辞令をいただき直に課員に引き合わされた。県下保健所勤務 石橋昌一、黒川 清、一ノ瀬英親、

その日から勤務した。そして退庁に際し公衆衛生課にDDTの配給があつて、私も50オンス缶を頂だいし、出勤早々初めての恩恵に浴したのだった。

出勤翌日から忙がしくなった。これまで化学工業に従事していたので今からは衛生行政と化学技術面の勉強が必要で、うっかりしては居られないのだ。

増俸通知書

谷口 順一

1. 金貳千壱百円也

右の通り発令に付御通知します

昭和22年7月26日 長崎県衛生部長

翌8月5日、衛生監視員の取去した重曹の定量

分析を命ぜられ、直に分析に取掛かり、その日丸一日を費やして終了し、翌6日次の通り成績を報告した。

試験成績書

1. 食用ソーダ 壺種

販売者 長崎市 治屋町乙22
新日本産業株式会社

但し右は昭和22年7月25日付梅経防第1033号を以て試験依頼に係る分

成分表 (%)

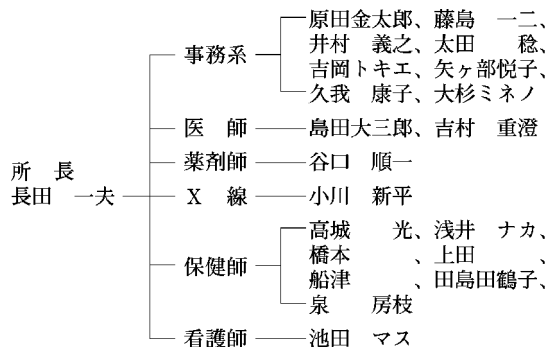
重炭酸ナトリウム	71.65
炭酸ナトリウム	18.31
硫酸ナトリウム	3.61
炭酸アンモニウム	3.11
塩化ナトリウム	2.71
その他	0.61

同22年8月10日、課内錬成海水浴で時津海水浴場行となったが、私は小瀬戸の仏様参りのため、課内錬成に同行できなかった。

同8月12日から15日まで生鮮物集荷荷受会社関係現場の指導監視の实地訓練を本田真三枝技官に受けた。

翌8月16日は吉田公衆衛生課長指導のもとに衛生監視員全員大場町魚市場に至り検査実習を行なう。

翌々8月18日、公衆衛生課から親放れして、長崎市今魚町長崎県立長崎中央保健所に配属されて長崎中央保健所に出勤し、長田一夫所長に着任申告、所長は同所薬局の責任者に命じ、直に小川新



平氏と事務の引継を済ますよう指示すると共に同所員全員に紹介された。

以上の面々であった。

同8月20日、下釜 勝氏が当所に配属になり着任、直ちに各職員に帯同紹介した、そして私の補助と試験室を見てもらう事とした。

昭和22年9月5日、衛生部から、米軍払下げで入手されたペニシリンが初めて当保健所に配給され、直に性病患者にこれを施用した。しかし話に聞いていた程の効果が見られないため更に施用したが淋菌に対する目立った効果は見られなかった。試用医師は島田、吉村両医師であった。

同9月10日午前中、食品衛生監視員の資格試験が取り行われ受験し、午後から玄関に最も近い第一クリニック室を移して、理化学試験室に模様替して開設した。その後毎日のように氷菓の収去を実施して細菌検査を行なった。

同9月13日、衛生部の指令に基づき任官するための手続書類を提出することとなった。

同22年11月20日、次の辞令を受けて三級官に任官した。

谷 口 順 一

長崎県技術吏員に任命する

三級に叙する

昭和22年11月20日

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

八号俸を給する

技師に補する

長崎県長崎中央保健所勤務を命ずる

昭和22年11月20日 長 崎 県

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

食品衛生監視員を命ずる

昭和22年11月20日 長 崎 県

通 知 書

長崎県技術吏員 谷 口 順 一

11号俸を給する

昭和22年11月20日附右の通り発令になったから通知する

昭和23年2月20日 長崎県総務部長

焦 眉 の 急

松尾 康夫 (昭12)

近頃我が家の室温は35度以上になる日が多くなった。今年はどうしてこんなに暑いのかと、つい口にする。せんないことと思いがらの愚痴である。熱中症の多発で救急車の信号も悲鳴に近い。全国的な猛暑のなかで、同級生諸兄は、どんな案配であろうかと、ひょっと気になる。全員に、といっても、私を含めて生存者は9名に過ぎないが、早速電話をかけてみた。結果は予想のとおり、今直ちにどうこうという方はいないようで、まずは一安心。具体的に言えば、元気で全く異常なし、といわれた方には文句なしに即脱帽であった。内臓の異常はないが、足が駄目で、ほとんどベッドの上とか、いつも病気勝ちで社会とはほとんど無縁という方は気になる。その他は一病息災で普通の生活ができる状態であった。今年か来年に米寿を迎える、高齢者たちだから、何もかも立派だとは言えないのが当然のことで、あまり気にするのも如何なものかと思ったりしている。

さて話は変わるが、構造改革を目指した政策が実施の段階に入ったことはご承知のとおり。改革なくして成長なしと、すごいハッパをかけられた公の組織では、その大波をどのようにして乗り切るかという大変な事態に直面して四苦八苦している。当然のことながら、長崎大学も例外ではない。己に法人化され、あらゆる面で改革へ向けての大

事業がどんどん進行しているやに承っている。

先日、長薬同窓会から、いただいた暑中見舞いに、「大学も自律と競争の時代に入り、さらなる高度化、個性化を図らねばならない。同時に同窓会は支援団体としての位置付けが明確となり、組織の強化を図らねばならない。云々」という趣旨が訴えられていたが、胸にジーンとくるものを感じた。

大学ご当局が新体制のもとで、学生の指導や研究に更には経費の捻出に苦心惨胆されている。それがなんとなく、ひしひしと伝わってくる。

母校の浮沈にかかわる大難航を自然にして我々同窓会員も、拱手傍観してよいはずはない。何らかのお手伝いができぬものか、この87歳のボケ老人でも焦眉の急を感じている。そこで、「笑止千万この老いぼれが、なんば言うとか、そげんことは先刻承知の助だ。まかせとけ」と失笑を買うかもしれないが、実はそれを期待しての妄言である。

諺に、「火事場の馬鹿力」というのがある。常ひごろは、いかにも無力そうであるが、いざという時には予想もしない大力を出すものらしい。

<へなちょこも修羅場じゃ変わる金時に>

同窓の皆さんのご活躍とご健勝を祈りながら筆を擱く。

妄言多謝

クラス会の思い出

河野 信助 (昭17)

昭和15年4月、旧制長崎医科大学附属薬学専門部(通称薬専)に入学した私共は、戦時中のため6ヶ月短縮されて、17年9月に卒業した。今年12月で卒業後62年と3ヶ月が経過したことになる。

最初のクラス会をしたのは25年後の42年の秋で、場所は茂木の二見荘だった。当時はまだ仕事に追われ、クラス会を楽しむ気分には程遠く、5年目

毎に長崎で行った2回目の昭和52年になって、ようやく来年から毎年やろうと云うことになった。

堀君の発案でクラス会名を「滔々会」とし、命名後第一回を岡山で開催。滔々は水の流れるさま、同時に私共が薬専第20回の卒業だから、10+10も意味している。その後は長崎と長崎以外の地を一年おきに選んで、毎年夫人同伴で滔々会を開催し

た。長崎では牟田君のプラザホテルに宿泊、翌日は近郊で学生時代の思い出を楽しんだ。長崎以外の地では箱根、唐津、京都、由布院、高山、宮島、四国、山口、奈良、天の橋立などそれぞれに世話人を決めて行い、楽しい思い出を沢山に残すことができた。第20回滔々会は平成9年（1997）の長崎でした。

この頃になると、お互の年令も70代後半で参加者が次第に減少した。特に神谷君、井手君をはじめ末永君などの級友を失い、体調をくずす人も多く、最近では長崎以外の地に行かず、毎年ルークプラザホテルに集っている。

実は一昨年の滔々会を最後にするつもりで昨年は開催しなかったが、まだ希望者があって今年は10月19日開催。参加者は野本君、松下君両夫妻と

牟田君と私の僅か6名でした。世話人として、今年の開催を後悔している今日この頃です。



前列 右より 牟田、松下夫人、野本夫人
後列 右より 松下、野本、河野

おそらく最後のクラス会

田崎 和之（昭22）

世の中、長寿社会といっても、喜寿を過ぎて傘寿に近い齢となれば、体の何処かに不具合があってもおかしくないし、今日はピンピンしていても明日はコロリと逝くかも知れません。

5年前に長崎でクラス会をしました。又ここいらでやっておかないと、声をかける方もかけられる方も、何時ダウンするか判らないということで、生き残り30名全員に予告の案内と希望を問いました。この秋か来春かの問いに、来春の指定は皆無でした。待てないからこの秋に早くやれということでしょう。長崎か雲仙温泉かの問いには、全員雲仙でした。曜日問いに、この歳になると何時でもよいの中に、是非土曜日という希望がありました。1人でも多く参加出来るように土曜日を選びました。

そこで、雲仙の有明（ゆうめい）ホテルで、11月13日（土）に行くことにしました。紅葉には1週間遅いような感じがありましたが、好みの部屋を希望通りに確保出来ました。全く返答のない者もいましたが、いろんな体不調の為に残念ながら欠席という便りも貰いました。

丁度半分の15名の参加希望があつて、まずまず

かなと思っていましたら、日が近くなると本人や連れ合いの体調が悪くなり11名になりました。同伴歓迎にしたら夫人5名が加わりました。

ホテルが送迎バスを出して呉れるというので、長崎駅と諫早駅の待合室を集合場所にして、全員バスの中で談笑しながら雲仙に向いました。

途中、小野島の校舎跡に立ち寄りしました。道路から校門に入るところがガードレールで遮断されて脇の酒屋の駐車場になっていました。その脇から中に入って、記念碑の前で写真を撮りました。給水塔は相変わらず残っていて、その下辺りが赤トンボ広場と言われているらしい。

お山雲仙に登るにつれても、紅葉の赤い色が見えません。紅葉の時期が過ぎて散ってしまったのかと思いつつも、葉が散ってしまったようにも見えませんでした。後で女将の話によると、今年は度々の台風で木の葉が傷んでしまって、紅葉色に成りきれなかったそうです。

ホテルが開業百周年ということで、宴席の料理は100年会席という豪華なメニューを案内されていましたが、この歳になれば量より質で願いたいと、前もって話しておきましたら、多からず少な

からずの程好く美味しい料理でした。

卒後57年目、白髭・禿頭の爺さんになっても昔に帰って、酒量は落ちましたが、敬称抜きの方言で賑やかに語り合いました。終戦直前に学徒動員で工場（水俣）にいて空襲にあった時のこと、彼は待避壕の中において座る位置が僅か1メートルの差で爆弾に吹き飛ばされるのを免れ、怪我だけで助かったものの、其処から遠く逃げて行き暫く姿が見えなかったのが、我等一同は彼は死んだと思って「俺たちは彼の為に黙禱をした」などと、彼本人の前で思い出を語っていました。

校歌と応援歌のコピーを全員に用意して、校歌は全部、応援歌は第一・第二・第三を2番まで歌いましたが、もう忘れたと言う者がいました。同席のご夫人から、この応援歌はどんな時に歌うの

ですか、と尋ねられました。言われてみれば、第一応援歌の2番の「白衣は赤く血に染みて 戦庭深くまるぶとも など強敵を屠らざる」と歌われると、戦争の歌かなとも取れます。「野球でもスポーツは、相手を倒して勝たなければなりませんから、やはり戦いの応援歌です。」と答えておきました。

朝食も昨夜と同じ部屋で、一同揃って摂りました。

帰りは、送迎バスで諫早駅経由で長崎駅に送って貰いました。

今後、クラス会の案内はクラス全員にはおそらく出来ないだろうと思いますが、それでは寂しいので、集まれそうな者の中で声を掛け合ってはどうか、と思っているところです。



小野島 校舎跡にて

卒後55年記念クラス会について

吉岡 龍三 (昭24)

24年卒の私たちは、5年を節目として（たまには2年でしたこともあります）同期生会を開いておりましたが、本年は55年を迎えましたので、記念クラス会を、長崎市茂木町の割烹旅館・恵美で去る10月30日に開催しました。

写真でご覧のように16名の方が参加されました。一泊したので夜遅くまで歓談でき、料理は魚中

心でしたが、さすがに長崎は魚どころだけであって、新鮮で盛りだくさんで、遠来の友人からたいへん喜ばれました。遠く奈良から北島君が、また宮崎から酒匂君（実に55年ぶり）が参加され感激しました。

なにせ久しぶりにお会いする方が多いので、話は尽きないのですが、会の最後には、北島君の巻

頭言の朗誦のあと校歌を斉唱し、有意義な一夜を過ごすことができました。

実は私たちは長葉でも珍しい卒業生なのです。まず戦後第一回の入学生であり、また第一回薬剤師国家試験の経験者です。次に男子学生のための最後の卒業生です。(次年度から女子学生が入学してきました。)

今回の60年になると、私たちも齢80を越え、集まるのが大変だろうということで、この会を最後に全体的な同期会にピリオドを打つことにしました。

それでも2年置きぐらいにしたらという意見も

でました。

長崎グルッペは、毎年成人の日の前に新年会を同じ恵美で実施しておりますが、それは続けて行きますので有志の方の参加を希望いたします。(福岡から日帰りできます。最終長崎発J R21:45 バス21:30)

また、私たちは長葉24会という規約を設けて、主として亡くなられた友人に僅かではありますがご香典をさしあげておりますが、これも残金25万円が費消次第止めることにしました。

当日の写真を添えますので、下欄の氏名と参照して懐かしんでください。



前列左より 松本、吉田(旧筒井)、吉田、森、横尾
中列 吉岡、野方、久田、塚本、築城
後列 北島、大石、麻生、酒匂、宇野(旧向井)、西依

長崎地区の26卒会は

中倉 敬昭(昭26)

今年も過去の人間が集まりました。それは平成16年3月27日(土)生き残った長崎地区の26卒であります。意義深く、喜ばしいことです。今回も無責任でよろしい、と言う世話方のすすめで筆をとってみました。

今年の諏訪神社該当者は3名でした。先ず圓ちゃんの本田圓次君が傘寿なのであります。つまり日本の男性平均寿命を、元気で軽く通り越した

のであり、全くお見事であります。彼は永らく教職に携わり、校長先生も経験したという、カクシャクたる姿には頭が下がる思いです。

次に学生時代から、マンドリンの名手であり、書道教授もやり、昨今は写真芸術に没頭していると聞く、芸術家の永江喜一郎君が喜寿です。もう一人は、26卒代表の同窓会理事を永年お願いし、勿論この会の代表で、何かと世話方を惜しまない

篠田英夫君が喜寿です。

例年は2月の寒い時期でしたが、寒いのは苦手バイという老人の声に、世話方が配慮してくれたのでしょ。

諏訪神社の参拝後は、例によって、セントヒル長崎で昼食、そして碁会、夕刻時に祝賀会、会食雑談と凡そ定めめのコースです。写真は、その時の諏訪神社参拝と、セントヒルの一室であります。

実は諏訪神社の待合室で、私が何げなく「テレビによくでる桜の立山公園というのは、ここから遠いのであろうか」と問いかけたら、世話方の一人である立石正文君が、昼食後、彼のマイカーで案内すると言うのです。彼の邸宅も、その通り道であるというのです。立石君の親切さには、涙がでました。佐世保の坂道に勝るとも劣らない、あの長崎の坂道を彼の車で私だけ案内してもらい、桜には未だ一寸早過ぎの立山公園を知る事ができたのであります。

さて、セントヒルでの碁会のメンバーは、本田圓次、篠田英夫、黒田隆次の3君と、偉そうに指導的立場にあり、と言う、佐世保の貞方典君と私、中倉敬昭の5名。

特筆すべきは、黒ちゃんの黒田隆次君でした。明らかに上達しているのです。私は確実に敗けました。

聞けば諫早の旧制中学で同級生であり、現在諫早市で開業医の斉藤先生（6段）という方に時折、置碁で打ってもらい指導を受けているというのです。

いかに老化しようとも、もともと頭が良く、出来が良く、物事に情熱がある人は、何をやらせても、上達するという証明なのでありましょ。但し今回、貞方君との対局では、貞方君の眩惑戦法にしてやられたらしいので、次回を期待しているところです。

途中から、立石正文、峰唯信、江頭文昭、永江喜一郎の4君が揃って計9名。夕刻は該当者の祝辞、会食、雑談です。前回の会報でも説明していたように、アルコール類を飲む者が少ないので、その分セントヒルの儲けは少ないのですが許してもらいましょ。

ところで私自身ですか？勿論、避けたい老化現象ではありますが、それは不可能。大部ガタがきていますので、いわゆる身分相応の、つつましい生活を心掛けていますのであります。

只、老いて残った趣味の囲碁だけは、とっくに限界過ぎと解ってはいても、ボケ防止よ、とへ理屈をつけ、新聞棋戦などの会に参加して居ります。今年も長崎新聞主催では私にバカヅキが舞込んで、佐世保のパート代表（6名）となったので、行けるうちに行っておこうかと去る9月20日（敬老の日）に再び長崎まで。長崎三菱会館での県大会に参加し、軽くひねられて帰りました。何しろ県代表の打ち手ともなれば、私のようにいい加減ではないのです。生活がかかっているのでは、と思わせるくらいの恐ろしく強烈な打ち手であります。

ともあれ、私ども過去の人間は楽しくできればよいのです。





追憶 わが畏敬の師 故西田貞治翁 (昭9)

服部俊明 (昭28)

(現 東北化学薬品KK顧問)

思えば厳しい上司が大阪に来られたものだ。

一度彼が支店長室から出て、各部課の机を歩けば居並ぶ社員は襟を正して身構えたものだ。どんな下問がいつどこで誰に落ちるか分からない。

専門誌は勿論、新聞雑誌にもよく目を通していないと返答出来ず大目玉の雷が落ちる。全員の前で上司にも大恥を搔かせる事になるのである。

何と言っても翁はどこにでも通用する人材の育成に専心された。中でも管理職を対象とした西田学校は毎月初め定期的に開かれていた。松下政経塾発祥以前の話で洪庵や諭吉の適塾の名残りがあった。

教義の要は経営管理論に始まり、大学、中庸、孫子や時局にも及んだ。部下の統率育成に当たったの基本姿勢をソクラテスやプラトンの問答し続けられた。特に今でも心に残り私を支えているものは3H主義「心：強力な精神力・健康な体・頭脳：一を聞いて十を知れ」が口癖であった。新分野の開発には少数意見の尊重と、幸運を探り当てる能力とアンテナを磨けと説いておられた。

翁は豪放磊落、骨太の人脈を持っておられた。業界は言うに及ばず山村雄一阪大総長や政財界では松下幸之助を始め多くの知己を得て、肝胆相照らす親交を深めておられた。それ故に業界では道修町の権威として恐れられていた。翁は「己を尽くし、考えて、祈る」が彼自身の悟りきった生活信条とも言っておられた。

部下に対しては「愛、信頼、寛容」が基本の基である。「出藍の誉れと、人造りには、峻厳にして温情は溢れる如きものでなければならない」と心を鬼にして諭された姿は今も私の胸に甦る。翁は多くの叙勲にも輝かれ、位人身を極めた後、会社を勇退されて大分に隠居されたが、余生を楽しまれる間もなく、足早に鬼籍に旅立たれた。しかし、人の二三倍濃密に充実した気概と情熱の生きざまは多くの人の心に今も生き続けていく事だろう。

願わくば天下国家の安泰と、長業同窓会の発展を見守って頂きたいものである。

以上

学部および同窓の皆様には益々ご清栄の事とお慶び申し上げます。

また同窓会報については毎年大学の近況、金城鉄壁に改築中とか同窓諸氏の動静など喜ばしく拝読致しております。

この4月から国立大は独立法人としてスタート致しました。これに関しては中島薬学部長先生はじめ全教・教員のご苦労は如何ばかりかと拝察しております。誠にお世話様ですと申し上げる外、言葉を知りません。お説の通り薬剤師過剰時代を、目前に控え生き残りを掛けての競争は一段と激しさを増す事でしょう。

さて私事ですが、遠い仙台に在って、毎年同窓会のご案内は頂きながらも勤務の都合や、やばうで日程が取れず残念でございます。心ならずも

おんぶに抱っこの役立たずの会員で申し訳ありません。

昨年は一念発起して関東支部の総会に出席致しました。その節は本部から西脇金一郎会長もお越し頂き、当地の富安一夫会長にもお目にかかれて大変光栄な一時を過ごしました。それは単なる懇親会だけではなく、各界でご活躍の同窓の先生方の手作りの研究発表会も併設されていました。

どなたも優れた見識と目的意識を持った素晴らしい研究成果の発表でした。今までの一般論では各界でビッグに活躍する諸先輩を後輩が誇りに思うのが常でしたが、今回はスーパースターの後輩に恵まれた事に、逆に先輩が誇りに思う結果にな

りました。これはもう笑いばなしにもならない話と恥じ入る次第でした。

卒業後50年に及び会報を一方的に受け取るだけでしたが、残りが短いせいかわ歳を重ねると、何故か故郷が恋しくなり追憶の情は一入です。

そんな訳で色々な思い出の中から、前に勤めていた会社での貴重な思い出話を小文に致しました。

昭和9年卒の故西田貞治翁・当時常務だった大先輩のほんの一部の話です。この中からこんな先輩もおられたのかと、何かを同窓生として汲み取って頂き歴史の一ページに申し送る事が出来たら望外の幸せに存じております。

オリンピック開催年とクラス会

近藤 基 (昭31)

今年昭和31年卒クラス会は卒業48周年、4月10日(土)11日(日)の2日間、北九州市で開催された。第28回アテネオリンピックの年と重なった。昭和27年入学の年は、第15回ヘルシンキオリンピック(日本が16年ぶり、戦後初の参加)、卒業の昭和31年は第16回メルボルンオリンピック(南半球で初の開催)、我々のクラス会は4年ごとの分かりやすいオリンピックの年に全員集ろう、関東、関西、博多、長崎ブロックで持ち回り、節目は(10周年、20周年(第21回モントリオール)30周年)は長崎市で開催が、いつしか2年ごとになり平成になって毎年開催となった。

現役で活躍中、又、悠々自適の元気な諸姉姉、参加者22名、交通の便の良い宿の小倉駅前リーガロイヤルホテルに14時集合、まず北九州市小倉区の人気スポット、小倉城、城公園、松本清張記念館めぐり、かつての公害工業都市からの脱却変貌ぶりを確認願った。

宵の宴は、北九州市屈指の枯山水庭園を持つ、観山荘別館で、宮崎さんによる記念撮影。残桜を観ながら、幹事の歓迎挨拶、昨年開催地幹事山口さんによる乾杯音頭で開宴、新たな試みとして出

席者全員による2分間スピーチを願った。自身の思い出、信条、趣味、健康、やむを得ず出席出来なかった友人の近況と話題豊富で、楽しく過ごし、さらなる友情を深めることが出来たと思う。最後に来年49周年を横浜で50周年を長崎市で開催と決定、本村幹事の力強い一本締めで1次会は終了。2次会は、リーガロイヤルホテル幹事室に場を変えた。かつての酒豪も歳には勝てず翌日に備え早々の解散となった。2日目はレトロ門司港めぐり、JRで小倉～門司港へ移動、九州鉄道起点0哩標前、重要文化財に指定された門司港駅舎を入れて記念撮影、黒川紀章が設計した、高層マンション31階にある門司港レトロ展望室で休憩、美しく変化する海峡のパノラマ360°を眺め、はね橋(ブルーウィング)横より土星をイメージした双胴の観光船ヴォイジャー号に乗船出航、下関唐戸港経由、下関水族館、海峡ゆめタワーを右に眺めながら関門海峡クルージング、昨年NHK大河ドラマ「武蔵と小次郎」の決戦場となった巖流島に上陸し散策、80分の楽しい船の旅であった。遅い昼食は海峡ダイニングで、再会を約し解散となった。



昭和32年卒クラス会だより

後藤 達元 (昭32)

今年は台風の多い年で、その影響で雨のクラス会になりました。思い出深いそして変わり行く長崎の地で5月15～16日に、米寿になられる一番ヶ瀬先生、喜寿になられる奥様ご夫婦をお迎えして開催されました。我々も古希となり、何かと忙しい身であり又心身に不自由を感じる年にもかかわらず総勢18名の参加をいただきました。

15日(土)は晴れていれば軍艦島(端島)沖サンセット・ディナークルーズで長崎鼻に建設中の女神大橋の下をくぐり、香焼ドック、伊王島、高島、端島と巡り、夕日を眺めての食事を期待していましたが台風の余波で湾内だけのディナークルーズになりました。しかし湾内からの長崎の街の夜景を楽しみながらの食事、それから豪華客船ダイヤモンド

ンドプリンセス号が処女航海に向けて三菱ドック岸壁に明かりをつけて横着けされている様子は、今の長崎を感じる約2時間のクルーズでした。あと喫茶「銀嶺」にて先生から全国を巡られたお寺の塔の写真、奥様より手作りの七宝焼き小物入れのプレゼントをいただき、楽しい語らいの夜を過ごし宿への帰路となりました。

翌16日(日)台風はそれでしたがやはり雨模様でした。宿のJRホテル長崎をあとにし出島ワーフ、水辺の森公園とぶらり散策に出かけましたが、小糠雨降るとはならぬ土砂降りとなり、大浦の四海桜での買い物そして早めの昼食をとり解散。次回幹事は千葉の深山氏にお願いし、伊豆方面での再会を約しそれぞれ家路に着きました。

